

鹿による牧草の被害と対策

紙 屋 茂

(農学部附属農場)

目 的

ここ数年、冬期において入来牧場内草地に、野生の鹿の出没が頻繁になってきた(写真1)。野生の鹿は入来牧場内の放牧地や採草兼用地に栽培しているイタリアンライグラスを夜間に採食しており、鹿の食害により牧草への被害が大きくなっている感がある(写真2)。入来牧場においては放牧を主体とした仔牛生産を行っており、草地における牧草生産量が減少すると、冬期放牧も困難となり、粗飼料の購入量が増大し、経常収支に与える影響は大きくなる。そこで鹿による食害の実体を把握し、それに応じた対策を講じるための調査を行った。

調査方法

電気牧柵により鹿の食害をなくした草地(牧柵区)を作り、牧柵区と鹿による食害のひどい草地(対照区)での収量を比較した。共試草種として、入来牧場で冬期に栽培しているイタリアンライグラス(ハナミワセ品種)を用い、九月中旬に播種し、牧柵区については放牧前後に収量調査を行った(図1及び写真3)。

結果と考察

調査期間を通じて、対照区の草高は数cmで地上部収量はほとんどないと考えられたことから、対照区の刈り取り調査は行わなかった。一方、牧柵区は11月26日の調査の結果、草高47.8cm、乾物収量2.7tom/haという高い値であった。A区は11月28日より現在まで成牛約35頭を、B区は12月5日より12月24日まで成牛約45頭を、C区は12月25日より1月24日まで成牛約45頭を、それぞれ時間放牧(2時間位)を行った。D区は1月25日より放牧を開始し、現在も継続中である。

以上のように電気牧柵を設置することにより、鹿による食害の被害を大幅に低減し、冬の間も放牧することが実用規模でも可能となった(写真4)。また、放牧が可能のため、貯蔵粗飼料の消費が大幅に減り、繁殖牛と育成牛用の粗飼料を購入せずに済んでいる。電気牧柵設置費用は、現在までの粗飼料節約分で償却できた。



写真1. 鹿による食事（平成13年4月）

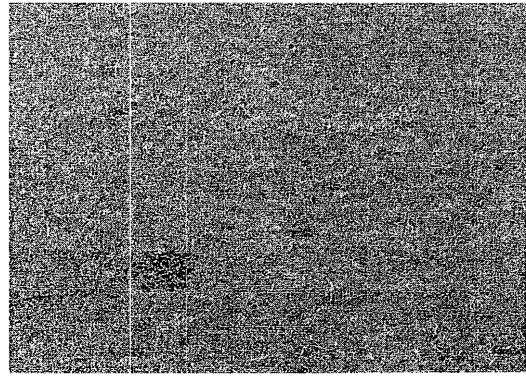


写真2. 裸地化した草地

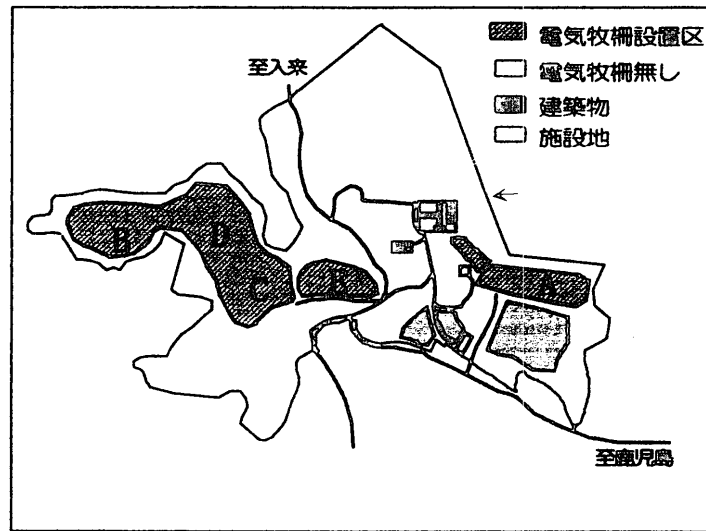


図1. 電気牧柵の設置区

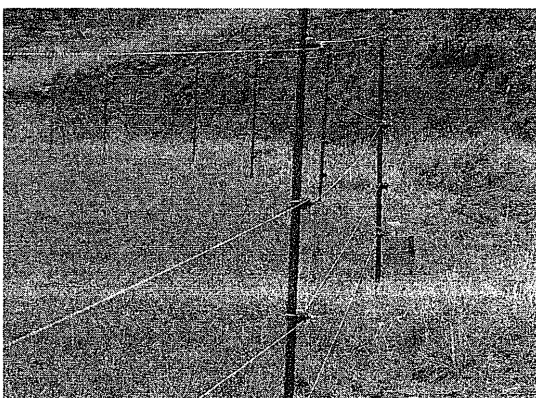


写真3. 電気牧柵設置後の状況



写真4. 冬季放牧中（平成14年1月）